

## 巻頭言 雄弁な沈黙

学校法人聖学院理事長・院長 阿久戸 光晴

遠藤周作の『沈黙』について、かつて亀井勝一郎氏が大要次のように評論していた。

厳しいキリシタン迫害の中で、多くの貧しいキリシタン農民から、拷問の果てに殉教していく者、転ぶ者「棄教者」等いろいろ現れた。その中で、神はこの機にどうして動くしなないのかと、悲痛な叫びが出る。しかし殉教そのものが実は奇跡なのだと、私は思う。遠藤氏はこの小説の構築において、殉教以上に「転ぶ」「棄教」行為において、実は神は沈黙していたのではないと、訴えているようだ。この小説の中で、迫害する日本人役人がポルトガル人宣教師の主人公に「お前が棄教すれば、拷問を受けている日本人キリスタン農民を赦してやることにする」と唆す。ポルトガル人宣教師の主人公は悩み祈る。「神よ、あなたはなぜ沈黙を守り続けられるのか」と。しかし沈黙が破られる時が来る。踏み絵に描かれたキリストがポルトガル人宣教師の主人公に語る。「踏み絵の私を踏むがよい」。しかし私「亀井勝一郎氏」は、最後までキリストをして沈黙せしめるべきであつた

と言いたい。信仰の究極の境地は、沈黙であり、沈黙のうちに神に「委ねる」ことのはずである。一方私の知る限り、キリストの最後について最も正確な言葉を放ったのはブレーズ・パスカルであつた。その著『パンセ』において、「イエスは、その友がみな眠り、その敵がみな醒めているのを見て、自らを全く父「なる神」にゆだねたもう」とパスカルは書いた。絶対の孤独という言葉を使つても言い表しえない、それこそ究極の沈黙がここゲッセマネにある「ゲッセマネの祈り」。作者の遠藤氏は信仰から語つてはならないか、語りすぎてはならないものに至る所で直面したはずである。登場人物たちは語りすぎたのだ。

（石内徹編『遠藤周作『沈黙』作品論集』クレス出版、

二〇〇二年。「」内および大要の文責は阿久戸）

私は、この亀井氏の評論に全面的に賛同したい。小説『沈黙』が感動的名作であり、外来のキリシタン宗（かつては仏教もまた外来宗教だったはずである）と伝統的信仰・文化価値との間の隔絶した「沈黙」に、相互理解という橋を架けようとする作家の意図を尊敬するとしても。また文字どおりの沈黙状態では、文学そのものが成り立たなくなるといふ現実があるとしても。なお参考として、三島由紀夫氏もこの作品について「神の沈黙を沈黙のまま突き放して表現することが文学の使命ではないか」と評している。殉教や棄教を生む激しい迫害時に対する神のメッセージは、人間の言語を超越する次元である。新約聖書・ローマの信徒への手紙八章二六節に「霊 自らが、言葉に表せないうめきをもつて「私たちのために」執り成してくださるから」と書かれている。聖霊なる神のわざも言葉を超越している。かく言う私にも、この夏以下の体験があつた。

私はこの夏、東北の地で、あるキリスト教団体主催の修養会での奉仕をさせていただいた。講演終了後、様々な質問が私に寄せられた。これこそ奉仕と自覚しつつ、私はすべての質問に誠意をもって全力でお答えした。感謝はされたが、終了後の慰労会で、ある委員の方がポツリと「先生は『沈黙』を恐れておられる」と言われた。それは、皮肉も悪意も感じられない真摯なものであっただけに、私にとって今後とも忘れることのできないであろう言葉となった。この言葉は、数多くの質問の中に、答えることができたとしても、回答者もまた沈黙を守り、神に委ねるべき事柄があるうことを、示唆していた。亀井氏の言われるとおり、あらゆる質問に対する答えは、ある段階で大いなる「存在者」に委ね、答えることを求められる主体は沈黙するしかない次元に到達する段階がある。

このような一般的質疑だけでなく、研究上の言葉もまた、この課題に直面させられるのではない。真理は常に、言葉化させられるべき課題があるが、言葉を超える次元に直面させられる段階がある。問われている課題への答えを言葉化する努力を研究者は放棄してはならない。その努力の放棄はいかなる理由にせよ、誠実で良心的であろうとする研究の使命を裏切ることになる。しかし、『対話』ならざる『言い負かし合い合戦』にテクニカルに勝利しようとして、強引に『真理』を説明してみせる態度」を私たちは避けなくてはならない。限られた世界での『勝利』を評価されたとしても、そのようなことには何の意味もない。

私たちは常に、究極の課題への探究に取り組み、その答えを出そうとする努力を目指す。さらに、その答えは言葉を超越する次元に必ず至ること（これを雄弁な沈黙と呼ぼう）を、私たちは覚悟しなくてはならない。誠実な発言、そして雄弁な沈黙……。当研究所の姿勢は、未来永劫このようでありたい。